

# 知財部門における生成AI活用推進プラン

レベル1:探索・理解フェーズ

~リスク最小化で始める知財業務革新~

企業の知財部門向けに、公開済み情報を活用した安全・安心なAI利活用の第一歩と、高付加価値・効率化事例を紹介します。



2025年09月29日

# 全体概要・カテゴリー一覧

知財部門における生成AI活用の4つのカテゴリーと関連ユースケース



特許情報の基礎分析からリスク対応までを網羅し、最初に理解すべき基盤 領域。既存業務の効率化と質の向上に直結します。

関連ユースケース:①競合分析の高度化、⑤無効資料の探索支援、⑥権利範囲の俯瞰 比較、⑦引用関係ネットワーク分析、⑫訴訟・係争リスクの予兆検知

# ② B. 発明創出·事業探索系

新規事業機会の探索や発明創出プロセスの加速など、創造や新規事業に関心のある層に響く領域。イノベーションの源泉となります。

関連ユースケース:②新規事業機会の探索、④公開特許を用いた発明評価の模擬実験、⑧サプライチェーン技術リスク分析、⑨国際出願動向の把握、⑩技術テーマごとの研究者マッピング

# ∠ C. 価値評価・ポートフォリオ系

経営層や知財戦略担当が注目する「価値」や「優先順位付け」の領域。戦略的な知財マネジメントの基盤を形成します。

関連ユースケース:③戦略的インサイトの提供、⑪SDGs・ESG視点の特許分析、⑬特許スコアリング、⑭ポートフォリオマッピング、⑮価値予兆分析、⑯ライセンス可能性評価

# り D. 無形資産・統合報告系

投資家向け・経営戦略に直結する領域。知財の価値を企業価値につなげる 「出口」として重要な位置を占めます。

関連ユースケース:①統合報告書における知財・無形資産投資の言及評価、®有形/無 形資産割合の自動算出、⑩無形資産KPIの抽出・比較、⑩投資家向けストーリーテリ ング支援

# Q A. 特許分析・リスク管理系:概要

## カテゴリー概要

特許情報の基礎分析からリスク対応までを網羅し、知財業務の基盤となる領域です。公開特許情報を最大限に活用し、競合分析や権利範囲の理解、リスク検知など、知財業務の質と効率を同時に高めることができます。

### 関連ユースケース一覧

- ① 競合分析の高度化
- ⑤ 無効資料の探索支援
- ⑥ 権利範囲の俯瞰比較
- ⑦ 引用関係ネットワーク分析
- ⑫ 訴訟・係争リスクの予兆検知

### ユースケース内容テンプレート

#### プロンプト例

AIに指示するプロンプトの具体例が記載されます

### ❷ 効率化効果

作業時間短縮など定量的効果

### **ビ** 高付加価値効果

質的向上や新たな価値創出

#### 視覚的解説

図表やプロセス図などのビジュアル要素が入ります



# **②** ユースケース① 競合分析の高度化

発明の本質を短時間で把握し、競合の技術進化トレンドを分析するユースケー スです。特許公報から重要な情報を自動抽出し、戦略的な競合分析を効率化し ます。

### **囲 プロンプト例**

次の特許公報の内容を読み取り、①解決しようとしている課題②そのため の技術的手段③得られる効果を簡潔にまとめてください。

さらに、同一出願人が過去3年間に出願した同分野の特許と比較して、技術 的な進歩点や差別化の要素を指摘してください。

### **②** 効率化効果

特許1件あたりの精読時間が 1時間 → 15分に短縮

### **ビ** 高付加価値効果

競合の技術進化トレンドを抽出し、 戦略的分析資料を短時間で作成可能

### 公開特許分析プロセスのAI化

### 従来プロセス

特許公報収集

(手作業)

- 人手による精読
  - (1件あたり1時間)
- 分析メモ作成

(手作業)

傾向分析

(長時間の集計作業)

### AIプロセス

1 特許公報収集

(同左)

2 AI要約・分析

(1件あたり15分)

自動構造化

(課題・解決・効果)

技術進化トレンド可視化

(迅速な戦略立案)



# ② ユースケース⑤ 無効資料の探索支援

### 目的

公開特許・学術論文・ニュースから先行技術や公知事例を効率的に洗い出し、 無効資料となりうる文献を短時間で特定・評価します。

### プロンプト例

特許請求項(XXXX12345号)を入力対象とする

関連公開特許・学術論文・ニュース記事を検索

- 先行文献を特定し引用付き要約
- 新規性・進歩性への影響を3段階評価
- 判例・無効審判事例があれば参照

### ❷ 効率化効果

数日かかる探索作業を数時間に短 縮。専門家の判断を補助する事前ス クリーニングとして機能。

### **些** 高付加価値効果

無効審判リスクを早期に評価可能。 包括的な資料収集により意思決定の 質向上。

### 無効資料探索プロセスの変革



E

特許請求項入力

従来:1時間 AI活用:15分

文献検索 従来:1-2日

AI活用:1-2時間

資料精查

従来:1日

AI活用:1-2時間

リスク評価

従来: 半日

AI活用:30分

文献種類	従来検索	AI活用
特許公報	キーワード中心	文脈理解・類似概念
学術論文	特定ジャーナル	複数分野横断
ニュース	ほぼ未活用	公知事実の証拠
判例・審判	手動検索	自動関連付け



# ● ユースケース⑥ 権利範囲の俯瞰比較

### 目的

自社と競合のクレーム比較を自動化し、差別化ポイントを明確化します。特許 クレームを構造的に分解・比較することで、権利範囲の違いを視覚的に把握 し、戦略的な特許活用につなげることができます。

### クレーム比較の例

クレーム要素	自社特許XXXX12345号	<del>,</del> 競合YYYY67890号
基本構成	画像処理装置	画像処理装置
構成要素A	画像入力部	画像入力部
構成要素B	AI画像認識処理部	従来型画像認識処理部
処理方法	並列処理による高速化	逐次処理
出力形式	検出結果の表示	検出結果の表示

### プロンプト例

- 自社特許XXXX12345号と競合YYYY67890号を比較
- 1 各クレーム要素を分解し表形式で整理
- ② 共通点・相違点を色分け可視化
- ③ 差別化技術のビジネス的意味を解説

### ❷ 効率化効果

クレーム比較作業が 30分→10分に短縮

### **丛** 高付加価値効果

差別化技術を明確化し 戦略的活用が可能に

### 権利範囲俯瞰比較のメリット

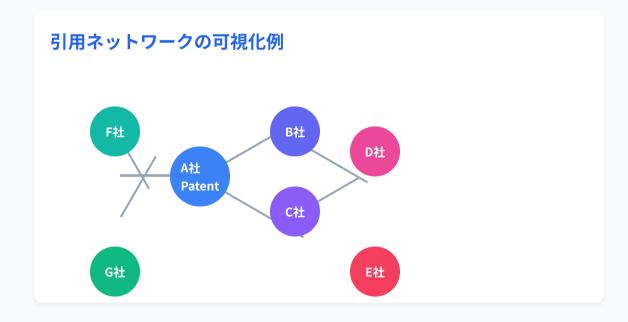
- 競合他社との技術的差別化ポイントの明確化
- 特許権侵害リスクの早期特定
- クロスライセンス交渉における立ち位置把握
- R&D部門への開発方向性のフィードバック



# ☆ ユースケース⑦ 引用関係ネットワーク分析

### 目的

特許の引用・被引用関係をAIで整理し、技術進化ネットワークを可視化しま す。複雑な引用関係を構造化することで、技術進化の流れや影響力の強い中核 特許、技術リーダー企業・発明者を特定できます。



### プロンプト例

- ① 対象とする公開特許番号リストを入力し、引用・被引用関係の抽出と 可視化用のノード(特許)・エッジ(引用関係)リストを作成
- ② 引用頻度上位10件の特許をランキング化し、その技術的特徴と影響範 囲を簡潔に説明
- ③ 中心性分析(次数中心性・媒介中心性)を実施し、技術リーダーとな る企業・発明者を特定して報告

### ❷ 効率化効果

複雑な引用関係の構造化が数時間→ 数分に短縮。数百件の特許関係を一 度に整理・可視化でき、分析工数を 大幅に削減。

### **些** 高付加価値効果

技術進化の流れを可視化し、重要特 許や技術リーダーを迅速に特定。戦 略的連携先や注目すべき競合の発掘 が容易に。

### 活用シーン

- 事業戦略策定時の技術トレンド・キープレイヤー分析
- M&A・技術提携先の探索
- 研究開発方針の決定
- 注目すべき技術領域の早期発見

# **④ ユースケース① 訴訟・係争リスクの予兆検知**

### 概要

訴訟公開情報と関連特許をクロス分析し、係争になりやすい特許群を特定しま す。過去の訴訟パターンを学習することで、将来の係争リスクを早期に検知 し、事前の対応策を準備できます。

### >\_ プロンプト例

- 1 以下の自社特許リストと、過去5年間の知財訴訟データベースを分 析してください。
- 2 係争頻度が高い技術分野を特定し、分野別にランキング化してくだ さい。
- 自社特許のうち、係争リスクが高いと判断される特許を抽出し、そ の理由を100字程度で要約してください。
- 4 出願人別にリスク度を「低・中・高」の3段階で評価し、表形式で まとめてください。

### ❷ 効率化効果

裁判例データと特許群の照合・分析作業が「1週間→1日」に短縮。膨大な 訴訟事例から係争リスクの高い技術領域を自動抽出できます。

### と 高付加価値効果

事前のリスク対応が可能になり、交渉戦略や出願戦略の立案に活用。係争 コスト削減や安定的な事業運営に貢献します。





# B. 発明創出・事業探索系:概要

## カテゴリー概要

新規事業や発明創出の場面で活用できる領域です。特許情報を活用して新たな 事業機会を発見し、発明プロセスを効率化・高度化します。R&D部門との連携 強化や、技術シーズの新たな応用先発見にも効果的です。

### 関連ユースケース一覧

- 新規事業機会の探索
- 公開特許を用いた発明評価の模擬実験
- サプライチェーン技術リスク分析
- 国際出願動向の把握
- 技術テーマごとの研究者・発明者マッピング

### ユースケース内容テンプレート

#### プロンプト例

AIに指示するプロンプトの具体例が記載されます

#### 効率化効果

作業時間短縮など定量的効果

### **丛** 高付加価値効果

質的向上や新たな価値創出

#### 視覚的解説

図表やプロセス図などのビジュアル要素が入ります



# ② ユースケース② 新規事業機会の探索

### 技術シーズの「用途マッピング」による応用先発見

公開済み特許群から「想定される用途」を自動抽出し、新たな応用分野や未開 拓市場を可視化します。R&D部門との発明発掘会議や用途展開検討で即座に活 用可能です。

### プロンプト例

対象: (自社や競合の特定技術分野に関する複数の公開特許番号リスト) 指示:

上記の特許群から、技術の「用途(応用先)」をすべて抽出しなさい。 抽出した用途を「行」、出願人を「列」としたマトリックス表を作成しなさ L1

このマトリックスから、まだ参入プレイヤーが少ない「有望な用途領域(ホ ワイトスペース)」を指摘しなさい。

### ❷ 効率化効果

手作業の用途整理が「半日 → 30分」 に短縮

### **丛** 高付加価値効果

新規市場や他分野応用のヒントを発見 し、R&D部門への価値ある提案が可能

### 用途×出願人マトリクス例

用途 / 出願人	自社	A社	B社	C社
医療診断装置	•	•	•	
自動車センサー	•		•	•
工場検査	•	•		•
農業モニタリング		•		
スマートホーム			•	
環境モニタリング				

ホワイトスペース発見! 黄色のエリアは「競合が少なく、市場機会の大きい領域」。特に「環境モ ニタリング」は全社未参入で新規事業機会として有望。



# **②** ユースケース④ 公開特許を用いた発明評価の模擬実験

### 目的

公開特許を題材に、評価支援ワークフローを模擬実験します。発明アイデアを 公開特許情報と比較し、その新規性・進歩性・事業可能性を素早く初期評価す ることで、発明発掘会議や選別プロセスの質とスピードを向上させます。

### プロンプト例

- #評価対象(公開済み特許を比較対象にして評価)
- #**指示** この発明アイデアについて、関連する公開特許群と比較し、以下の 点を簡易的に評価しなさい。

「新規性」の可能性

「進歩性」の可能性

「事業的な利用可能性」

※評価の根拠となった公開特許番号を併記すること。

### **②** 効率化効果

アイデア初期評価時間が「数時間→ 30分」に短縮

審査引例となりうる特許を素早く発

発明の質向上(検討時間の確保)

### △ 高付加価値効果

将来的な未公開アイデアへの適用を 見据えた実証

評価プロセスの標準化と品質向上 発明者へのフィードバック効率化 データに基づいた客観的な議論の実 現

### 発明アイデア評価プロセスの変化

### 従来プロセス

発明アイデア提案

特許調査担当者が手動で調査 (数時間~数日)

評価資料作成

発明検討会議

### AIプロセス

発明アイデア提案

生成AIによる特許比較・評価 (約30分)

自動評価レポート作成

データ活用した効率的な会議

### 評価レポート例

### 新規性評価:

JP20XX-XXXXXX等と比較し、構成要素 Aに差異あり

### 進歩性評価:△

JP20XX-XXXXXとJP20XX-XXXXXの組合 せにより進歩性の課題あり

### 事業可能性評価:◎

市場規模・他社動向から高い収益性が期待できる分野。JP20XX-XXXXXより優位性 あり

# □ ユースケース® サプライチェーン技術リスク分析

### 目的

公開特許と業界ニュースから、主要部材や工程の知財リスクを洗い出し、サプライチェーン全体の脆弱性を把握します。権利集中が高い重要部材や代替技術候補を特定し、調達リスクの低減に貢献します。

### >\_ プロンプト例

- 部材・工程に関する公開特許・ニュースを調査
- ①権利集中リスクを定量的に示す
- ②代替技術候補と出願人をリスト化
- ③サプライチェーン全体のリスクシナリオを解説

### リスク評価テーブル

部材/工程	リスク度	代替技術候補	推奨対応
半導体素子A	高(権利集中)	B社新規素材技術	クロスライセンス 検討
コーティング工程	中	C社の代替プロセス	技術提携交渉
センサー部品	高(訴訟多発)	自社開発中技術	設計変更検討
冷却技術	低	現行技術で問題なし	継続監視

### ❷ 効率化効果

断片的な公開情報整理を自動化 し、手作業での情報収集・分析に かかる時間を80%削減します。

### **ビ** 高付加価値効果

代替技術探索や調達リスク低減に 貢献し、製品開発の上流段階でリ スク対応を可能にします。

### サプライチェーンリスク可視化



■高リスク領域:権利集中度が高く、代替技術が少ない領域

■ **中リスク領域**:一定の権利集中があるが、代替手段も存在する領域

■ 低リスク領域:権利分散または自社保有技術で対応可能な領域

**AIによる予測:** 今後2年以内に部品製造領域での特許紛争リスクが高まる可能性があります。代替技術の先行確保または戦略的提携の検討が推奨されます。



# ユースケース⑨国際出願動向の把握

### 目的

各国公開特許の時系列分析により、国・地域別の重点分野を可視化し、グロー バルな技術トレンドを把握します。特定技術分野における国際競争の主戦場を 早期に特定し、戦略的な出願・事業展開の判断に活用できます。

### プロンプト例

- 技術分野の公開特許リストを入力
- ①国別出願件数推移をグラフ化
- ②出願件数急増国を指摘
- ③地域別重点分野と将来インパクトを整理

### ❷ 効率化効果

各国データ収集・整理作業が「2~3日 → 数時間」に短縮。複数国の出願傾向を 迅速に把握し、意思決定を加速。

### **ビ** 高付加価値効果

国際的な技術主戦場を早期察知し、地域別の技術重点分野の変化を把握。グロ ーバル戦略策定に貢献します。

### 国際出願動向の可視化例



### 分析ポイント

- ✓ 中国の出願件数が急増し、2023年以降は主要技術分野で最多
- アジア地域全体(日中韓)での件数増加が顕著に
- ◎ 地域別重点分野の変化を把握し戦略立案に活用可能



# ユースケース⑩ 技術テーマごとの研究者・発明者マッピング

### 目的

公開特許・論文から研究者・発明者の活動領域を抽出し、外部連携候補を可視 化します。技術分野ごとの専門家や各組織の強みを把握することで、共同研究 やライセンス契約の対象を効率的に特定できます。



### > プロンプト例

- 特許群から発明者を抽出
- ①発明者ごとに技術テーマを分類
- ②所属機関を名寄せ
- ③共同研究ネットワークを可視化し有望候補を提示

#### ❷ 効率化効果

名寄せ・整理作業を自動化するこ とで、数日かかる分析作業を数時間 に短縮。散らばっていた発明者情報 を一元管理できます。

#### **ビ** 高付加価値効果

共同研究・ライセンス候補の効率的 な探索が可能に。技術テーマ間の意 外なつながりや新たな連携機会の発 見にも貢献します。

### 活用例

- 外部連携先探索:特定技術テーマの専門家を素早く特定
- M&A候補評価:買収候補の研究者資産を可視化
- 人材採用支援: 有望な発明者の特定と採用戦略へ活用

# ♥ C. 価値評価・ポートフォリオ系:概要

### カテゴリー概要

知財の価値を定量化・可視化し、経営戦略や投資判断に活かすための領域です。特許価値のスコアリングやポートフォリオ分析から、ESG・SDGs視点での評価、収益化可能性まで、知財の「価値」に焦点を当てたアプローチを提供します。経営層や投資家への価値説明にも直結します。

### 関連ユースケース一覧

- ③ 戦略的インサイトの提供
- ⑪ SDGs・ESG視点の特許分析
- (13) 特許スコアリングによる価値可視化
- (4) ポートフォリオ価値分布マッピング
- (15) 価値予兆分析(動的視点)
- 16 ライセンス・収益化可能性評価



### 価値評価のためのAI活用ポイント

### 複数情報源の統合

特許データ、市場情報、論文、企業財務などの異なる情報源を横断的に分析し、 より包括的な価値評価を実現

#### ② 定量分析の自動化

引用分析やファミリー国数などの特許 指標の集計・可視化が数時間から数分 に短縮

#### ∠ 経営貢献

知財の価値を「経営の言葉」で説明 し、戦略的意思決定に直結させる



# 母 ユースケース③戦略的インサイトの提供

### 公開特許×論文×ニュースの「クロスインサイト」

複数の情報源を横断的に分析し、知財の視点から経営判断に資する戦略的インサ イトを創出します。分散した情報を統合することで、より広い視野での技術・市 場把握が可能になります。

### **囲 プロンプト例**

### # 対象情報

- A社の最新公開特許(特開2024-XXXXX)の要約
- 関連分野の最新論文(XXXX学会)の要約
- 最近の市場動向に関するニュース記事

#### #指示

これらの情報を統合し、以下の3点で経営層向けに簡潔なレポートを作成せよ:

- 1. 最新の「技術トレンド」
- 2. 競合の「強みと弱み」
- 3. 今後の「事業インパクト」

### ❷ 効率化効果

複数情報源の収集・分析・統合にか かる時間を1日→2時間に短縮

### と 高付加価値効果

知財部門が「経営の言葉」で戦略的 インサイトを提供し、部門価値の向 上に貢献





# ユースケース⑪ SDGs・ESG視点の特許分析

### 目的

公開特許の中から環境対応、省エネ、リサイクル技術などを抽出し、ESG貢献 度を可視化。サステナビリティ報告書や統合報告書の作成支援、競合分析に活 用できます。

### >\_ プロンプト例

- 特許群を入力(例: 貴社の技術分野の過去5年分の公開特許リスト)
- 以下の要素を自動的に抽出し分類してください: ①環境負荷低減技術 ②省エネルギー技術 ③リサイクル・循環関連 ④水 資源保全 ⑤生物多様性
- 出願人別にESG貢献度をスコア化(5段階評価)し、SDGs目標との対応 関係を示してください
- 結果を報告書用の視覚的なグラフと表に整理してください

### 2 効率化効果

CSR/ESG報告資料作成の工数を75%削減。手作業による環境関連特許の抽出・ 分類が週単位の作業から**数時間**に短縮。

### **些** 高付加価値効果

知財データを企業サステナビリティ戦略に直接接続。投資家向けESG情報開示の 質向上と、競合のサステナ技術動向の早期把握が可能に。





# 🕒 ユースケース(3) 特許スコアリングによる価値可視化

### 目的

公開指標を用いて特許の潜在的価値をスコアリングし、高価値特許を効率的に 識別します。被引用件数、ファミリー国数、残存期間などの客観的指標を組み 合わせることで、戦略的な知財活用が可能になります。

#### 自社特許XXXX-123456

スコア: 92

99 被引用: 48件 ● ファミリー: 12カ国 ★ 残存: 12年

自動運転技術における障害物認識アルゴリズムの中核特許。競合他社からの引用多数で、モビリティ 分野での参入障壁として機能。

#### 自社特許XXXX-567890

スコア: 83

99 被引用: 32件 ● ファミリー: 9カ国 🖶 残存: 8年

エネルギー効率最適化システムの基本特許。成長市場への展開可能性が高く、ライセンス収益が期待 できる技術。

出願人別 高価値特許保有数

#### 自社

A計

### プロンプト例

- ① 以下の特許群を対象に、引用件数・ファミリー国数・残存期間を基準にスコ ア化してください。 スコア算出式: (被引用件数×0.4) + (ファミリー国数×10×0.3) + (残存期間  $\times 5 \times 0.3$
- 出願人別にスコア上位10件をランキング表にまとめ、出願人間の比較ができ るようにしてください。
- 上位特許について、技術的意義と想定される事業インパクトを100字程度で 解説してください。

#### 

定量指標の収集・集計・分析作業が 「3日→2時間」に短縮

#### **丛** 高付加価値効果

高価値特許を迅速に抽出し、優先的な 活用・維持判断や競合分析に活用可能

#### 活用シナリオ

- ポートフォリオ内の価値分布把握
- 維持年金支払い判断の客観的基準
- M&A・ライセンス交渉の優先候補選定
- 競合他社との技術力比較
- 研究開発投資の成果測定



# **⑤** ユースケース⑭~⑯:ポートフォリオ評価/ライセンス可能性



### ポートフォリオ価値分布マ ッピング

出願人別・技術分野別に特許価値スコアをマッピング し、強み・弱みを可視化します

#### > プロンプト例

- 特許群を対象に
- ①技術分野別×出願人別マトリクスを作成
- ②価値スコア分布を示す
- ③強み・弱みを色分けして可視化

### 2 効率化効果

膨大特許群を一括整理

### **些** 高付加価値効果

経営層に分かりやすく提示

### ~

### 価値予兆分析(動的視点)

時系列データから将来価値が高まりそうな特許を特定 し、事前対応を可能に

#### > プロンプト例

- 特許群の時系列データを解析
- ①被引用件数の増加傾向を可視化
- ②競合類似出願動向を整理
- ③将来価値が高まる特許を抽出し理由を説明

#### ❷ 効率化効果

動向把握を自動化

#### と 高付加価値効果

M&Aやライセンス候補を早 期発見



**16**)

### ライセンス・収益化可能性

評価

公開特許群と市場データをクロス分析し、収益化戦略を 策定

#### >\_ プロンプト例

- 特許群+市場ニュース+競合情報を入力
- ①ライセンス可能性をA~C評価
- ②売却候補性を整理
- ③事業化インパクトを定量指標付きで解説

#### 2 効率化効果

情報統合処理を自動化

#### **些** 高付加価値効果

収益化戦略の候補提示

# (B) D. 無形資産・統合報告系:概要

## カテゴリー概要

無形資産価値と統合報告を活用した、経営層・投資家向け価値訴求の領域です。知財を含む無形資産の価値を可視化し、企業価値向上への貢献を明確に示すことで、経営戦略との接続を実現します。財務・非財務情報の統合による投資家向けコミュニケーション強化にも貢献します。

### 関連ユースケース一覧

- ⑰ 統合報告書における知財・無形資産投資の言及評価
- 18 有形資産/無形資産割合の自動算出
- ⑲ 無形資産KPIの抽出とトレンド比較
- 20 投資家向けストーリーテリング支援

### 期待される成果例

#### 経営・投資家視点での価値向上

知財部門の活動を企業価値向上に直結させ、知財情報の経営・投資判断への活用 を促進します。財務指標だけでは見えない企業の競争力や成長潜在力を可視化で きます。

### 砂 効率化効果

統合報告書や財務情報分析を自動化 し、数日→数時間に短縮

#### ビ 高付加価値効果

知財・無形資産の投資家価値を定量化 し、IR資料を強化

#### 統合報告フレームワークとの連携

財務情報

知財 • 無形資産

ESG情報

統合報告による企業価値向上

# (B) D. 無形資産・統合報告系: ユースケース(7~20)

### ⑪ 統合報告書言及評価

統合報告書を比較し知財・無形資産投資への言及を評価

#### >\_ プロンプト例

統合報告書PDFを入力

知財・無形資産・研究開発の記載を抽出

ページ番号付き表形式に整理

具体性をA/B/C評価

競合比較し強み・弱みを提示

#### ② 効率化効果

数日→数時間

#### ビ 高付加価値効果

投資家向けIR評価に直結

### ⑩ 無形資産KPI抽出と比較

各社が開示する無形資産KPIを横断比較

### >\_ プロンプト例

統合報告書を入力

知財・無形資産関連KPIを抽出

企業別比較表を作成

過去3年推移をグラフ化

業界平均と比較し要約

#### 2 効率化効果

KPI抽出を自動化

#### ビ 高付加価値効果

業界横断比較で重視度を可視化

### ⑱ 有形/無形資産割合自動算出

財務諸表の公開データから有形資産・無形資産比率を算出

#### >\_ プロンプト例

財務諸表を入力

有形・無形固定資産の金額を抽出

総資産比率を算出

過去5年推移をグラフ化し業界平均と比較

#### 砂 効率化効果

財務データ処理を自動化

#### **ビ** 高付加価値効果

業界ベンチマークや企業比較が可能

### 🚳 投資家向けストーリーテリング支援

特許ポートフォリオ分析と統合報告書を統合し投資家向けメッセージを作成

#### >\_ プロンプト例

特許分析+統合報告書を入力

知財が成長戦略に寄与する3つの柱を整理

投資家向け資料用のグラフ・表を作成

特許件数・ESG貢献指標を補強要素として提示

#### ② 効率化効果

IR資料作成を効率化

#### ビ 高付加価値効果

投資家視点での知財価値提示を強化

# **②** まとめとアクションプラン

### レベル1の狙いと効果

### ○ 公開情報で小さな成功体験を創出

公開済み情報だけで「小さな成功体験」を創出・共有し、生成AIの価値と可能性 を部門内で実感する

### |~ 効率化と高付加価値の両立

単なる業務効率化にとどまらず、質的向上や新たな視点の提供により、知財業務 の質的転換の足掛かりを作る

### ● リスク最小化のアプローチ

公開済み情報のみの活用で、機密情報漏洩などのリスクを最小限に抑えたAI導入を実現

### 具体的アクションプラン

1 パイロットチーム結成

3~5名の実証チームを選定し、役割分担を明確化

~1週間

PoC実施

紹介したユースケースで実証を行い、週次で進捗共有 1 au au au au 1 au au au 1 au au au 1 au au 1 au au 1 au

3 成果報告と評価

定量的・定性的成果をまとめ、部門内報告会を実施  $\sim 1.5 \pm 16$ 

4 レベル2への移行計画策定

エンタープライズ版AI導入やセキュリティ対応の検討

~2ヶ月後



### 次のステップに向けて

### I エンタープライズAIの検討

より高いセキュリティと管理機能を備えたエンタープライズAIソリューションの 検討

### ♣♣ 部門横断AIチームの編成

知財部門と研究開発部門、法務部門など他部署との連携体制の構築

### ☎ AIリテラシー研修の実施

プロンプトエンジニアリングなど、AIを効果的に活用するための知識・スキル向 上施策